

## 美術の窓(30)

## 東西文化交流と中国絵画

大和文華館館長 吉川逸治



法隆寺金堂壁画 第6号壁



谿山行旅図 茫寛筆 早春図 郭熙筆

(台北・国立故宮博物院蔵) (台北・国立故宮博物院蔵)



昨年は奈良県をあげて、シルクロード博を催したのに応じて、本館も春は大谷探険隊の壮挙を偲んで、その遺品を中心に西域絵画の特別展をひらき、秋は、シルクロード美術の源に溯って、古代ギリシア壺絵の特展を行いました。今秋は、これらの人類の歴史的活動の結実として生れた最も著しい精神的努力の結晶である中国北画を中心とする特別展の開催を心掛けて居ります。

シルクロードの美術は、アレクサンドロス大王の東方遠征と、それに引続くローマ勢力の進出によって、古典古代の美術、工芸がオリエント一帯、インドから中国、朝鮮半島、日本にまで拡ったことを教えます。ギリシア・ローマの美術は、それまでの古代プリミチーフ様式の狭い視野を破って、自由に人体の運動・姿勢・表情を表現する態度と技術を開発し、ものの立体感と空間の遠近描法も実現して、オリエントからインドに伝達され、中国まで新しい美術を教育します。この新しい美術は、新しい佛教思想の伝播に貢献しました。

しかし、アジア古典化努力は、行く先々でそれぞれ多様な民族の芸術意志、文化伝統と衝突しながら、融合し、諸国の新しい民族的古典文化を生むことになるのですが、自から、インドや中国の如く、すでに遠い古代から伝統豊かな美

術をもち、自から西方伝来の古典美術を自分のものとする度合いが強かったのです。

その上、共通要素としての佛教を美術作品に具体化する時は、それぞれの民族が自分の作品として、作ることを著しく努力します。

例えば、模写で展示しましたキジルの壁画の傑作「太子観舞女」や「城中分舍利」の大作など、古典古代の人間主義と物質主義を止揚して、プリミティヴィズムの文様裝飾伝統を復活させ、単純な写実主義による人物の立体描写や遠近法構図を抑制し、舞踊や歌謡、讀経や朗讀の韻律に協和するリズムをもった姿態、対称的な色面の組合せ、現実よりも構成の秩序を重んじる構図など新しい中世宗教画を形成する点は、西欧の十一、二世紀のロマネスク壁画に先んじています。

しかし、同じ佛教美術でも、中国の隋唐の美術、その直接の忠実な後輩の作である法隆寺の失なわれた四大変相図は、隋唐佛画が古典古代の現実主義を恐れず、立体描写も透視図法も駆使し、次元の高い佛教的人間主義の芸術を達成します。西方古代の絵画の古典技法の習得、吸収、消化がいかにか徹底的な厳格さで遂行されたかは、コロタイプ版の法隆寺壁画の如来、菩薩、僧形らの人物から、調度、遠景の見事な出来映えを観察すればわかります。

この古代古典がいかにか多様な部門で学ばれ、追及されたかは正倉院の琵琶搦面の象乗人物旅行図、狩獵宴席図から、二月堂法華曼荼羅、真言高僧像と中国美術がいかにか古典古代の人間主義を古典に據って止揚し、超絶していったかが感得されます。

人間主義の「古典」を超越するために、巨大な佛陀の像を造り、周囲に無数の微細な千体佛を累集せしめる方法もあり、これら無数の小宇宙に囲まれた大宇宙は、自然界の生成消滅のうちに佛陀と靈魂の時空を超絶する存在であることを教示します。古典古代文化の核心である人間像は、東の地で佛教と結合することで高次元の文化の実現に貢献します。

如何にして美術は、古代の人間主義に高次元の精神性を賦与するか。極大・極小・無限数など量と数による超越とともに、造形美術は形象、構成の抽象化によって堅牢不滅を試みる。元来、人類は原初神々や靈の象徴として円・方形・角錐など幾何学的形像を産み出した。

佛教美術は、曼荼羅美術を制作し、如来、菩薩、天部など無数の聖像を幾何学図形の体系に階層的に整理する。しかも、聖像は生々しい人体像であり、多種多様な精神を具顯する。ここでも古典主義は高次の存在の核心となる。尊像のみではない。抽象図形の枠は、

華麗な格天井を写し、周縁は現代的な花鳥の姿で満たされ、豪華な花の壺に飾り立てられる。羅漢の現実と密着した姿なればこそ、石草木に伴なわれて実存するが、度を過せばカリカチュアに墮ちる。

大乘佛教と古代の古典主義は、シルクロードに沿って人々を教化し、救済に努めた。その過程で古代の古典文化は、ひと時、諸民族に文化的繁栄を齎した。やがて精神的墮落をも生じたのであろう。廢佛毀釈が惹起され、西方は貧しい沙漠から起ったイスラム教に席捲される。

宗教的ビューリズムは、中国では、伝統の經学の復興と老莊思想の興隆が、絵画に新しい主題として、山水の神秘を授け、新しい課題は古典古代の人間中心の物質的な遠近法による自然とは、次元を異にした精神主義の山水の新価値を開拓することになる。この認めがかな新しい宇宙論の課題は、その後、中国美術の独特な核心となる。

西方キリスト教世界の絵画が、ロマネスク絵画を脱し、ジョットの革新的写実主義に進んで、やがて科学的遠近図法を骨格とする宇宙像の絵画の実現に努力するのは、14.5世紀の貢献であったが、その間に東西に蒙古帝国を中央にいかなる交流が美術上で行なわれたかの謎は、すでに半世紀以上前からの美術史学者の課題となっている。

季刊 美のたより No.86

平成元年 2月 25日

発行 大和文華館